

終戦前後の思い出

—国民学校から新制中学—

大東 信祐 陸自57

平成の御代も終わり、新たに令和の年号を頂く時代に入り「昭和」の時代も歴史の帳の中に入りつつあるように感じられる。

60余年を重ねた昭和の時代においても1桁の戦前時代、20年の終戦までの戦争時代、終戦後の混乱期からの立ち直り、安保騒動、東京オリンピック、東西冷戦の終結、中東の紛争と石油ショック等々、時代の区切りとなる事件等が多く存在した。

我々（防大1期生）の年代は、高校現役が昭和9〜10年生まれであり、国民学校に入学し、また最後の卒業生となり、教育制度も戦後の6・3・3・4制が施行され、新たに義務教育となった「新制中学」への最初の入学生であり、昭和と云う時流の変動の中を生きてきた世代であったと思う。

したがって、大東亜戦争は戦争中の国民学校の学童、中学は戦後の混乱期、高校時代は朝鮮戦争の時代と云う事となる。この時代の流れの中で我々の世代は勿論戦前派ではなく、戦中派ですらない、しかしながら戦争中の影を曳

きずり、いわゆる「戦後派」にはなり切れなかった世代であったと云えるのではないかと思う。

ここで大東亜戦争時代前後の我々の年代の者の体験の一部を述べてみたい。

昭和16年12月の開戦は国民学校1年生であったが、ラジオ等で開戦の詔勅を聞いた記憶はない。17年4月父が南方(ジャワ・スラバヤ)に出征し、母と子供4人が東京で留守を護ることとなった。この頃には「大日本青少年団」が結成され、学校でも「少年団」の活動があった。

昭和17年春のドーリットル空襲は東京で迎えたが、戦局の進展に伴い学童疎開が薦められるようになり、昭和18年の夏には我が家では乳飲み子であった末子の妹を除く兄妹3名は、縁故疎開として父の故郷である広島県に疎開することとなった。父の故郷は広島県高田郡井原村(現在は広島市に合併され安佐北区)であり、父の弟が家業の農業を継いでいた。

故郷は広島から芸備線で1時間余の距離で、太田川の支流三篠川沿いに開けた農村であった。当時は村役場のあつた村の中心部はともかく周辺の農家の集落地区には、電気は「定額制(一戸に60W級電燈1燈)」であり、通電は日

没から日の出までと云う状態であった。

村の国民学校は各学年1学級でこじんまりしたものであったが、広島弁が使えない疎開者は「よそ者」として疎外され、「丁稚の子」扱いで、曰く「東京丁稚」「大阪丁稚」等と呼ばれた。当初4年生の知識では「丁稚」と云う言葉の意味が判らずキョトンとしていたが、意味が判ると「この野郎」と歯噛みをする思いであった。

広島での疎開生活約1年半を経過した昭和20年1月、父が突然南方から帰還してきた(後で南方との最後の連絡便であったのではないかと聞かされた)。これは父の勤務していた海軍省水路部が中国地区に分室を設置することとなり、その要員として帰国を命じたものようであった。分室は広島県に隣接した岡山県小田郡笠岡町(現笠岡市)の高等女学校に設けられ、家族もこれに従い笠岡町に移り、商家の離れで生活することとなった。当然私も笠岡の学校に転校した。

ここで当時の国民学校の状況に若干触れてみたい。笠岡町には男子国民学校と女子国民学校が並んでいた。登校は地区の6年生が引率しての集団登校であり、校門にはベンチが置かれ高等科の週番生徒が控えている。校門前で生徒は隊伍を整え、班長の「歩調取れ」「頭石」「直れ」の号令で校門を通過し、

教室前で解散すると云うのが毎朝の恒例行事であった。

当時の国民学校の教育はそれなりに戦時色の強いもので、修身の授業では半紙に毛筆で「教育勅語」を謹書する時間があり、当時の5年生の子供には難かしい漢字で苦勞したことを覚えていた。学級の名称も1組、2組等ではなく忠、孝、義、勇、武が学級の名称であった。この時期になると大都会から疎開で転校してくる者も多くなり、笠岡町の隣、広島県の大門地区には海軍の練習航空隊があり、昭和20年になると笠岡地区にも度々空襲警報が発令されるようになった。当時の子供たちは上空を飛行する米軍戦闘機の爆音を聞いただけでP51、P38、F6F等の識別ができたものである。

20年春頃になると、時として大門航空隊の人たちによる宴会が付近の旅館で行われることがあった(当時一般の人たちが旅館で宴会を開くことはまずなかった)。町では若い軍人の軍歌の高唱を聞いて「大門から特攻要員が出撃するのだ」と噂をしていた。

8月6日の広島に対する原子爆弾の投下は「新型爆弾」の攻撃で大きな損害を出したと伝わったが詳細は判らず、山陽本線も広島は不通と云う事であった。広島親戚関係の安否も不明であり手の打ちようはなかった。

9日の長崎への原爆投下、ソ連の参戦は子供達には伝わらなかった。しかしながら9日の夜、隣の福山市がB29の夜間爆撃を受けて炎上し、終夜にわたり山の向こうに夜空を焦がす火炎の反射が見え、戦争を身近に感じていた。学校は夏休みに入り、旧盆には父の故郷に行き、祖先の墓参りを予定していた。広島に原爆が落とされた直後であり、この様な状況下で両親も随分迷ったことと思うが、結局10日過ぎに5年生の私が一人で父の故郷に行き、墓参ることとなった。

山陽本線はまだ不通であったので福山から福塩線経由で三次に出て芸備線に乗り換え、「井原市」の里に辿り着いた。当時、街では食料事情も逼迫し、我が家の食料扶持を減らすことも背景にあり、いわゆる「食料疎開」という要素もあつたのかとは後で思つたことであつた。途中三次付近の駅に広島で被曝して焼け焦げた車両が側線に残骸をさらしているのを見て、広島被害の大きさを改めて思い知らされた。故郷の井原村にも市内で被曝した怪我人がかなり身を寄せていたが回復できずに死亡される方も多く、各集落の「焼き場」(当時は各集落の山にご遺体を奈毘に付す場所・焼き場があり、薪を積んで火葬をしていた)から毎日茶

毘の煙が上がっているのを見て広島
被害を改めて身近に感じた。

この様な状況で8月15日の終戦は
島根の父の故郷で迎えたが、前述のよ
うな電力の状況で玉音放送の予告等も
知るすべがなく、当日は良い天気だっ
たので川辺で友達と遊んでいた時に
「戦争は終わった、日本はアメリカに
降参したらしい、子供たちはすぐ家に
帰れ」と云われ、急いで叔父のところ
に帰った。それから数日は落ち着かな
い日を過ごした、終戦の翌日？ B 29
始め多数の米軍機が大編隊で空を押し
て飛来し子供心を驚かせた、今から考
えれば米軍の示威行動であろう。

とにかく父母の下に帰らなければと
云うことで、山陽本線が開通したこと
を聞き、急いで笠岡に帰った。広島駅
で山陽本線に乗り換えたが市街地は一
面の焼け野原で、駅付近にあった親戚
の家も被災で跡形もないと云うことを
聞き、駅から外に出ることなく帰路に
ついた。

8月下旬以降、笠岡では海岸の岬の
地区で軍用品の焼却処分が行われ、米
兵が監視役で立ち会い、ジープと云う
車を初めて見た。父の勤務していた「笠
岡分室」も閉鎖と云うことで大量の書
類等を校庭に掘った穴で焼却していた

ことが印象に残っている。

9月に入り新学期が始まったが、間
もなく教科書の墨塗り等の指示が伝え
られ、国語の授業では先生が昔の教科
書の文章をプリントして使って授業を
していた。また朝礼等で学童が集まっ
た際に号令を掛けるのは、軍国主義的
だからいけないなどの行き過ぎた
(誤った) 指導もあり、地理、歴史の
課目はなくなり、先生、生徒共にオロ
オロした状態が続いた。

私自身はあまり考えていなかった
が、5年生の2学期ともなれば、中学
への進学についても考えなければなら
ない時期になってきた。

当時笠岡町には女学校と商業学校は
あったが男子の中学校はなく、中学進
学希望の男子は倉敷中学が隣の広島県
の福山誠之館中学を受験する者が多
かった(江戸の初期には笠岡地区は福
山藩領であったことから、福山に対す
る親近感が強かった)。

2学期が始まって間もなく、学級担
任の先生から「この中で中学に進学し
たいと思っている者は」との問いかけ
があった。学級の3分の1位が手を挙
げた。先生は「中学進学希望者は来週
から居残り勉強」と云うことで、週に
2日程漢字の書き取り、熟語の意味等
の課外授業が行われた。書き取りはと



昭和21年12月29日(日) 朝日新聞

もなく、熟語の解釈は疎開先と云うこ
とで漢和辞典もなく、学校で交替で漢
和辞典を引き、意味を発表すると云う
学習であった。

終戦直後の混乱、かつすべてに気力
を失った時期に、教え子たちの受験準
備に取り掛かった先生の教育に対する
熱意には大きな感銘を受け、当面何を
するべきか何も判らずウロウロしなが
ら漫然と日を過ごし、虚脱状態に近
かった子供たちにとって、改めて「勉
強をしなければならぬ」と云う意識
を持たせたことが戦後復興に立ち上
るの第一歩であったことを記憶してい
る。

終戦後間もなく、父は東京勤務とな
り単身赴任したが、昭和21年3月家族
も東京に引越し、練馬区の国民学校
に転入した。然しながら、占領軍の命
令によりいわゆる6・3・3・4制の
新教育制度が施行され、我々の学年は
新制中学の制度となり、中学までは義
務教育で入学試験なしで全員が「中学
校」に進学することとなった。とは言っ
ても占領米軍の命令により急遽開設さ
れた「新制中学」であり、新学期には
準備が整わず、授業らしきものが始
まったのは5月に入った頃であった。
この空白の間、我々生徒たちは草野球
等で遊び呆けており、世間から「六・
三制 野球ばかりが強くなり」と揶揄
されたものである。

広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
 - (株) 東京都民互助会……………表紙3
 - ローレルバンクマシ(株)……………表紙4
 - いちよし証券(株)……………25
 - 須藤石材(株)……………38
 - (株) 全国儀式サービス……………45
 - (株) 武蔵富装……………51
 - 信和株式会社……………51
 - (株) 和泉家石材店……………52
- 本誌へ広告掲載をご希望の方は、
事務局へご用命下さい。